

中国地域ニュービジネス特別賞

表彰事業

広島の象徴的商業施設「おりづるタワー」の企画、運営

株式会社広島マツダ

代表取締役会長兼CEO 松田 哲也



事業内容

世界遺産『原爆ドーム』の隣に、地下2階・地上14階建の複合商業施設「おりづるタワー」を建設し、企画・運営を行っている。1階はカフェと物産館、2階は貸会議室、3階から11階は貸オフィス、12階はワークショップフロア、13階は展望フロアとなっている。1階から13階展望まで、‘スパイラルスロープ散歩坂’で歩いて昇り降りができ、壁面には漫画家 佐藤秀峰氏が広島市の復興発展を描いた作品を楽しむことができる。ワークショップでは様々な折り鶴をテーマにしたデジタルコンテンツを用意しており、外壁のガラス張り空間『おりづるの壁』には折り鶴を折って投入することができる。この空間を埋めるには100万羽の折り鶴が必要で、人々の祈りや願いなどが蓄積し、時間をかけて壁を彩っていく。

【推薦団体】株式会社山陰合同銀行 広島支店

受賞理由

- 「人々の想いを形にする場所」という新しいコンセプトで、広島の過去・現在・未来を感じる場所としての新しい市場を創造している。
- 原爆ドームの近くには休憩施設や土産を買う場所が限られていたことから、カフェや物産館では広島にこだわった品をそろえ、広島のおもてなしを提供する場としての役割を担っている。
- 立地特性を生かし、資料館から原爆ドーム、おりづるタワー、紙屋町へと新たな人の流れをつくることで、地域商業の発展に寄与している。

会社概要

昭和8年に創業した広島を地盤とするマツダ系ディーラー。今期100期 85周年を迎える。広島県内の限られた市場の中で、地元の方々の信頼を得て事業基盤を構築してきたが、自動車業もメーカーの経営や供給される車種により業績は大きく変動するため、店舗開発の過程で残された不動産を活用し、安定した不動産収入を得てバランスの取れた経営・財務基盤を築いてきた。現在、人口減少による市場縮小や、自動車の技術革新により、基盤収益構造の変化も考えざるを得ないことから事業戦略として2つの『多角化』を打ち出した。自動車業ではボルボ、ロータス等のブランド展開やグループ会社による海外への中古車輸出を行いマーケットの拡張に取り組んでいる。2つ目は、アパレルやIT事業などの新業態へ進出を展開している。この挑戦により収益構造の多角化を図るとともに、『多様な人材の受け皿』として当社の発展を実践し、結果として広島への貢献を目指している。

会社所在地	〒730-0016 広島県広島市中区幟町13番4号広島マツダビル		
T E L	082-225-3600	U R L	http://www.hiromaz.co.jp/
会社設立	昭和16年5月	従業員数	583名
資本金	80百万円	売上高	22,059百万円(平成29年9月期)

施設概要



■屋上展望台 「ひろしまの丘」

○写真...「展望台」
※©akiko nakano



周囲がメッシュで覆われた、風がそのまま通り抜けるウッドデッキの展望スペース。眼下に平和公園と原爆ドームが広がり、復興した広島を全身で体感できる。晴れた日には宮島の弥山まで見渡せることも。

■1F物産館 「人と樹」



広島を代表する銘品や話題の商品など、地元で愛されているお土産を約1,000品取り揃える。原爆ドームがかつて広島県産業奨励館として広島の名産や文化産業を発信していたことから、その役割を担うべく事業を展開している。

■3～11F オフィス・テナント

○写真...「展望台」
※©masato yamaguchi



全フロアにバルコニーを完備し、広島を中心に部に位置しながらも、平和公園の緑や風、光を感じながら働ける快適かつ開放感のあるオフィスフロア。観光施設としての知名度との相乗効果により、ビジネスの拠点としても特異性を持つ。

■12F展望室 「おりづるの広場」 「おりづるの壁」

○写真...「おりづるの壁」
※©akiko nakano



折り鶴をテーマにした様々なデジタルコンテンツがある他、おりづるタワー専用の折紙で折ったおりづるで彩られる「おりづるの壁」に直接投入できるフロア。世界中から訪れた人たちの願いが積み重なり、「おりづるの壁」は完成する。

■1Fカフェ 「握手カフェ」

○写真...「カフェ」
※©akiko nakano



広島や瀬戸内の素材を使った、握手カフェオリジナルメニューを多数揃える。お好み焼きをスティック状にした「オコス」などテイクアウトできるメニューも多く、広島の名物を手軽に味わって頂き、広島の食を発信するというコンセプトで展開している。

■2F貸会議室



入居テナントだけでなく、外部からの利用も受けつける貸会議室フロア。オフィスフロアと同様、観光施設との相乗効果を狙う利用シーンが多いという特徴を持つ。